

平成 22 年 6 月 9 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19520130
 研究課題名（和文） 院政鎌倉期物語の表現構造とその基盤に関する研究
 研究課題名（英文） A Study of Representational Structure and Formational Environment of Insei/Kamakuraki monogatari (the "Cloister Regime/Kamakura" Narrative Stories)
 研究代表者
 菊地 仁 (KIKUCHI HITOSHI)
 山形大学・人文学部・教授
 研究者番号：50125762

研究成果の概要（和文）：

本研究は、平安末期物語・鎌倉擬古物語などと呼ばれてきた物語作品群を、いわゆる院政期から始まる一連の文学現象として把握することにより、大きく当時の文化状況のなかでの意義を考え直そう、という立場で進められた。

その結果、これら院政鎌倉期物語は、原典のみならず注釈書を経由した『源氏物語』の受容とともに、絵巻など視覚的な造形物との関連を再評価すべきであることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

This study is an attempt to reevaluate the significance of a group of narrative stories ranging from those in the late Heian period to those in pseudoclassical style in Kamakura period, by recategorizing them as a consistent literary phenomenon under the cloister regime of the time which started in the late Heian period.

It is shown that those "cloister regime/Kamakura" narratives should be better analyzed in relation to the acceptance of annotated editions of Genji-monogatari as well as visualized literary works of the era such as picture scrolls.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	300,000	90,000	390,000
2008年度	300,000	90,000	390,000
2009年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	1,000,000	300,000	1,300,000

研究分野： 人文学

科研費の分科・細目： 文学・日本文学

キーワード： 擬古物語・絵巻・古注釈・院政期

1. 研究開始当初の背景

平安後期物語（平安末期物語）と鎌倉擬古物語（中世王朝物語）とは、その名称の不安定さが象徴するとおり、なかなかその独自の価値を認められないできている研究の現状があった。

確かに、これらの物語が先行する『源氏物語』の圧倒的影響下にあることはまぎれもない事実である。また一方で、鎌倉擬古物語（中世王朝物語）は、『しのびね物語』のように、後続するお伽草子（室町時代物語）との弁別が不明な作品も珍しくない。

しかしながら、近年、『鎌倉時代物語集成』全七巻（1988-2001）や『中世王朝物語全集』全二十二巻（1995-）などの叢書の刊行により、研究対象としての本文や注釈も整備されつつある。そのような状況と呼応するかのよう、斯界にも神田龍身『物語文学、その解体』『源氏物語』『宇治十帖』以降』（1992）や辛島正雄『中世王朝物語史論』（2001）に代表される、新しい研究の潮流が形成されつつある。

研究代表者は、すでに1970年代より『浜松中納言物語』『松浦宮物語』『とりかへばや物語』『苔の衣』『我が身にたどる姫君』など、いくつかの物語について、単発的な私見を発表してきた。しかし、如上のような研究状況の変化に鑑み、改めて大局的な見地より、物語文学作品のみならず、近隣の文化事象にも注意を払いつつ、再考すべき問題の多くあることを痛感させられた。教科書的な通説にこだわることなく、もっと広い観点から文学史の自由な再編を試みるべき時機をむかえつつある、と考える。

以上のような経緯が、本研究を申請するに至った所以となったものである。

2. 研究の目的

本研究の目的を、次に方向・特色・意義の3点に集約して述べる。

（1）平安後期物語（平安末期物語）と鎌倉擬古物語（中世王朝物語）との統合的把握

これまで相互の密接な関連を認識されつつも、政治史的に古代・中世にまたがるため、必ずしも一元的に論じられることが少なかった両者を、院政鎌倉期物語として連続的に把握してみる。そのことによって、これまで

しばしば指摘されてきた前史としての『源氏物語』からの影響のみならず、後続するお伽草子群との関わりを見直すことが可能になる、と考える。

（2）院政期以降の物語に対する文化史的な観点よりの分析

ここで言う院政期は、とりあえず保元・平治の乱を中心とし、その初めを後冷泉朝あたりまでさかのぼらせた、やや広い概念である。この時期が、言語史からも政治史からも、単純に平安時代へ帰属させえないことは周知のとおりである。したがって、過渡期としての当代の特徴を十分に理解するため、とりあえず平安時代文学という枠組みを外し、広く文化史的な観点をも加味することで、新しい院政期の文学像の樹立を目指す。

（3）既成ジャンルの組み替えとしての院政鎌倉期物語の研究

上述したように、院政鎌倉期物語の研究は、文化史や社会史などと無縁ではありえない。そして窮極的には、既成の時代区分や研究ジャンルの再編をも孕みこまざるをえない性格のものである。したがって、本研究はいきおい学際的・領域横断的な色彩をも帯びてこざるをえない。とは言え、研究期間内に実施できることも限られており、とりあえず、問題意識の近い研究領域のなかでも日本美術史などとの接点を追究する。

3. 研究の方法

本研究の方法に関して、以下、年度ごとに分け略述する。

（1）平成19年度

平安後期物語（平安末期物語）と鎌倉擬古物語（中世王朝物語）に関する研究史を整理再検討し、現段階における問題点の洗い出しをまず行なう。同時に、対象物語本文の確定など基礎作業としての文献調査を実施する。当面の個別作品研究として、『小夜衣』『しのびね物語』などを取りあげる。

（2）平成20年度

前年度の研究史再検討の結果を踏まえ、研究の現状を反映した形で、既発表論文の根本的な改稿を行なう。また本年度においては、院政鎌倉期物語の概念を、できる限り効果的に機能させるべく、絵巻やお伽草子（室町時

代物語)など、近接する文学作品との交渉に着目した研究を行なう。

(3) 平成21年度

本年度は、前年度までの研究についての補足的な作業を行なう。特に、『伊勢物語』『源氏物語』など前代物語の享受については、古注釈や奈良絵本などとの関連にも注意しつつ研究を進める。なお、本研究の活動報告の一環として、次年度に単著の研究書出版を企画する。

4. 研究成果

以下に、院政鎌倉期物語の概念・院政鎌倉期物語と絵画・研究書の出版、の3点にわたって述べる。

(1) 院政鎌倉期物語という概念の有効性

院政鎌倉期物語という概念に関して、その対象範囲のうち、特にその下限のはらむ問題については下記の〔図書〕 所載稿で基本的な見解を示しておいた。

すなわち、『源氏物語』の影響のもとに始まる院政鎌倉期物語だが、その下限についてはお伽草子(室町時代物語)との関係が確かにやや不明である。しかし、〔図書〕 所載稿では、そこを無理に分断するよりはその曖昧さをあえて逆手にとることで、狭隘なジャンル論を超えた、より広い視野から文学研究それ自体のありかたを問い直しうる、と述べた。

実際、具体的には『しのびね物語』系の諸作品において、院政鎌倉期物語とお伽草子(室町時代物語)との腑分けは不可能である。その意味で、かつて明治・大正期に使用された「近古小説」なる学術用語が持っていた概念の再評価を提唱した。

(2) 文学作品の絵画化と院政鎌倉期物語

当初、それほど重要視していなかったが、予想以上に、本研究で一番豊饒な収穫があった分野である。

ちょうど、2008年度が、いわゆる「源氏物語千年紀」ということもあり、学会その他が主催する『源氏物語』とその周辺物語の絵画資料が、新資料も含め、かなりの種類と回数にわたって展示された。また、物語絵画関係の共同研究も複数進行中であり、その一部に、個人の資格で参加させてもらい、多くの知見を得た。

その過程で学んだことについては、主に和歌を中心とした内容ではあったが、〔学会発表〕 において物語や絵巻との関わりを発表した。物語的な設定の場面が絵巻や屏風のみ

ならず工芸品についても多彩な展開を見せること、『源氏物語』の絵画的享受という点で古注釈などの介在が無視できないこと、などを、院政鎌倉期物語の例も引証しながら報告した。

また、〔図書〕 所載稿においても、『伊勢物語』を例として、中世の古注釈が物語の絵画化に介在することを述べた。院政鎌倉期物語に直接論究する形の論文ではないが、視覚を通じた構図のパターン化という問題意識を共有する、〔学会発表〕 と相俟つ性格の論文である。

上記の論文を執筆するためもあり、多くの関係図版資料を購入し、また物語の江戸期版本については、東北大学附属図書館・国文学研究資料館で文献調査を行なった。

(3) 成果報告としての研究書出版

研究史を再検証したことを踏まえて、研究代表者の既発表論文『とりかへばや物語』『苔の衣』『我が身にたどる姫君』などについて、研究の現状を反映する形での大幅な改稿を行なった。また、『浜松中納言物語』についても、〔図書〕 所載稿を吸収しながら加筆訂正した。

対象作品数は必ずしも充分とはいいがたいが、これらの改稿によって、人工美や演技性などといった、院政鎌倉期物語の持つ特質に対して、研究代表者なりの見方がある程度体系的に提示できるようになったものと考ええる。

そこで、これらの改稿論文を含んだ単著の研究書を、2010年度下半期に三弥井書店より刊行すべく具体的に準備調整中である(書名、頁数など未定)。これによって、前著『職能としての和歌』(2005)とちょうど対をなすような散文版の研究書として、今回の研究成果を広く公開するものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕(計1件)

菊地仁、平安和歌から江戸絵画へ 歌意絵の景物描写をめぐって、平成20年度和歌文学学会6月例会、2008年6月21日、日本女子大学

〔図書〕(計3件)

菊地仁、他、竹林舎、伊勢物語・享受の展開(伊勢物語・成立と享受)、2010、p541(「中世の『伊勢物語』注釈とその周辺 物語草子から近世絵画への波及」を執筆、印刷中)

菊地仁, 他、新典社、平安後期物語の新研究 寝覚と浜松を考える、2009、p382
(「『浜松中納言物語』における対比的な表現」を執筆、印刷中)

菊地仁, 他、笠間書院、お伽草子百花繚乱、2008、p623
(「物語文学とお伽草子・しのびね型 物語をめぐって」を執筆、印刷中)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

菊地 仁 (KIKUCHI HITOSHI)
山形大学・人文学部・教授
研究者番号：50125762

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし